

コリント人への手紙 1 章 1～11 節 「神の慰め」

苦難の中での慰めは、どんな人から与えられるだろうかと考えてみると、同じような苦しみを経験した人が共感してくださったり、体験談を話してくださったりすることで、慰めが与えられるように思います。そして、ただ傷をなめ合うようなことではなく、主からの慰めを体験したことの証を聞くと、共に神様に目を上げ、主への信頼を新たにされます。そのような苦難の中で与えられる神様の慰めについて、今日の箇所パウロが語っていることに聞いていきましょう。

1. 苦しみの意味（：3～4）

この手紙は「慰めの手紙」と呼ばれることがあります。3 節から本文に入っただけで、この手紙の主題と言える「神の慰め」について語られます。

パウロはまず神様を賛美します。「神の慰め」のことを思うと神様を賛美せずにはいられないのです。「あわれみ深い父、あらゆる慰めに満ちた神」と神様のことを呼んでいます。

パウロは様々な苦しみを経験しました。迫害されたり、危険な目に遭ったり、人間関係に悩んだり、数々の苦しみを経験しました。しかし、「どのような苦しみのときにも」神様は慰めてくださったと告白します。それゆえに、神様はこれからも「どのような苦しみのときにも、私たちに慰めてくださいます」と信頼しています。

そして、そのような自分の体験から他の人たちを慰めることができると言います。神様の慰めを体験している人は、苦しみの中にある人たちを慰めることができます。自分が体験しているのだから、そのことには実感がこもっています。また、苦しみの中にある人に共感することができ、ふさわしいことばを語るすることができます。そして、自分自身の体験を話すだけでなく、「自分たちが神から受ける慰めによって」、他の人たちを慰めることができます。神様が慰めを与えてくださったことを証して、聞く人たちも神様に向かうように促すことができます。

私たちは苦しみに会うとき、どうしてなのかと思います。この苦しみに何の意味があるのかと悩みます。苦しみの意味は簡単に分かることではないでしょう。しかし、この箇所のパウロのことばから分かるのは、どのような苦しみのときにも、神様の慰めを経験することができるということ、そして、その経験によって、苦しみの中にある人たちを慰めて、神様に向かうように助けることができるということです。このことは確かに苦しみの意味の一つであると言えるのです。

2. 苦難の中での慰め（：5～7）

パウロはさらに重ねて、苦難の中に慰めがあることを語ります。すべての苦しみの中でも特に「キリストの苦難」と言っています。この「キリストの苦難」とはどういうことでしょうか。私たちが経験する苦しみの中には、自分の不信仰や不道德の結果として招いてしまう苦しみもあります。そのような苦しみはキリストとは関係がありません。キリストと関係する苦難とは、キリストに従っているゆえに経験する苦難ということです。

私たちが主キリストに従うゆえに苦難を経験するならば、キリストが私たちに慰めを与えてくださるのです。パウロには苦難が次から次へと襲って来ました。自分では受け止め切れないほどだったでしょう。しかし、そのように苦難があふれていても、同じようにキリストによって慰めも与えられ、あふれていたのです。そして、キリストによって与えられる慰めはあふれて、自分だけでなく、他の人たちをも慰めることになったと言うのです。

3 節から 7 節までに「苦しみ」、「苦難」ということが語られますが、それ以上に「慰め」ということが多く語られています。この箇所で「慰め」ということばは 10 回も使われています。そして、そのことばは「助け主」ということばと語源が同じです。「助け主」とはイエス様が聖霊のことをそう呼んだことばです。つまり、聖霊なる神様が私たちに慰めを与えてくださるのです。聖霊は私たちのそば近くにおいて、いえ私たちの心の内に住んでいて、親しく語りかけ、力付けてくださる慰めの神様です。ク

リスチャンは助け主、聖霊によって慰めを与えていただけるのです。

教会に連なる私たちそれぞれは、今までの歩みの中でどのような苦しみを経験してきたでしょうか。どのような「キリストの苦難」があったでしょうか。そして、神様はその苦難の中で、どのような慰めを与えてくださったでしょうか。そのような苦難の中でいただいた神様の慰めを、今苦難の中にある人々に語るなら、それを聞いた人も神様に祈り求め、それぞれにふさわしい慰めを与えられ、耐え抜く力を与えられ、共に神様を賛美するようになるでしょう。

3. 自分自身に頼らず、神に頼る（：8～11）

パウロは自分の苦難の体験の一つを語ります。それがいつの体験のことかはつきりとは分かりませんが、まだ記憶に新しい出来事だったと思います。「非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け」と言います。しかも、死を覚悟したほどであったということです。「生きる望みさえ失うほどで」、「死刑の宣告を受けた思いでした」と言っています。

そんな激しい苦難に遭って、パウロはどんな状態になったでしょうか。怒ったでしょうか。投げやりになったでしょうか。うつ状態になったでしょうか。そうなっても無理ない状況に追い込まれたことでしょうか。しかし、その中で彼は信仰において取り扱われました。「自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだった」と言います。自分ではもうどうにもできないという状況になり、死を覚悟したかもしれません。それでも、死者をよみがえらせることもできる神様に頼ったというのです。

そして、確かにその苦難から救い出されました。神様が救い出してくださったとパウロは言います。どのような解決や救出であったのかは分かりませんが、その背後に神様が働いていたと信じることができたのです。そして、神様は「これからも救い出してください」と信じています。神様に希望を置いています。

もし、私たちが自分ではどうにもできないような苦難を経験するとしたら、それは私たちが、自分自身に頼らず、神様に頼るように、本当にそうなるように導かれ、訓練されるのでしょうか。

それにしても人は一人ぼっちでは、そのような苦難に耐えることはできません。もちろん、聖霊なる神様が助け主として共にいてくださって助けてくださいます。でも、そのことを実際の体験として分かってくれる人の存在、そばにいて慰め励ましてくれる人、また離れていても祈っていてくれる人がいるなら、支えとなることでしょう。パウロもそれは同じでした。

パウロはこれからも神様が自分たちを救い出してくださることを信じて、神様に希望を置いています。その上で、「祈りによって協力」して欲しいと求めています。そして、祈りによって協力して欲しいというのは、パウロたちのためだけではなく、祈る人たちにも益となると言います。「私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになる」と言います。とりなしの祈りによって、福音宣教の働きに協力することになります。離れていて、直接的にその働きを助けることはできなくても、共に奉仕することになるのです。そして、その働きを通して神様の御業を見ることができて、共に神様に感謝をささげるようになるのです。

この箇所から教えられたように、苦しみには意味があります。どのような苦しみのときにも、神様の慰めを経験することができること、そして、その経験によって、苦しみの中にある人たちを慰めて、神様に向かうように助けることができるということです。たとえキリストの苦難があふれるほどでも、キリストによる慰めもあふれるほどに与えられます。慰めはあふれて、同じような苦難に遭う人たちの慰めとなるのです。そして、自分自身に頼らず、神様に頼るように、それぞれが信仰を成長させていただき、共に神様に感謝し、賛美を献げることができるのです。

ですから、苦しみのときにも、神様に向かい、神様からの慰めに目を留めるようにしましょう。そして、自分が受けた慰めを、苦しみの中にある人たちに伝えましょう。また、互いのためにとりなして祈りましょう。